

「古文書学実習」～安田女子大学生の未来へ向けて輝くまなざし～

2014.8.20（レポーター：近多恵美）

先日、書店に出向くと、可愛らしい看板で「古文書解読入門コーナー」が設置されていました。「カープ女子」ならぬ「古文女子」が世間を賑わす日もそう遠くないかもしれません。

さて、広島県立文書館では普及啓発活動の一環として、学外実習を受け入れています。この度8月5日に実施した安田女子大学「古文書学実習」は、平成4年に大学からの要請により受け入れを開始しました。これは、資料収集・調査研究等を職務とする学芸員資格を取得する際に必要な単位で、今年は文学部日本文学科の3年生15名が受講しました。

このレポートでは、当該実習1日の流れを紹介し、未来を担う若者の視点に迫ります。

※当館ホームページ「今日の文書館～日常の取り組みを発信する～」で、事前準備の様子もご覧いただけます。

1 文書館学概論（60分）

この概論は、文書館の社会的役割や行政文書の管理業務に関する内容です。ここでは、文書館は国民・地域住民共有の集合記憶保存装置としての役割を持ち、公文書は国民共有の知的資源であることについて確認しました。

また、年金記録問題等の具体例から公文書管理法について学んでいただき、当館の業務内容（文書の収集、整理、保存や普及啓発活動など）や、行政文書の管理方法（文書のライフサイクルや分類、評価選別など）についての現状を紹介しました。

2 古文書の収集・整理・保存（60分）

まず、局面によって定義は様々である「古文書」について、当館における概念（出所が広島県という組織の場合は「行政文書」とし、出所がそれ以外の場合には「古文書」とすること）について学んでいただきました。古文書というと墨書の文書を思い浮かべられる方も多いかと思いますが、このような理由で当館では昭和期の雑誌等も「古文書」として扱います。それは、学生の皆さんにも意外だった様です。

そのほかにも、当館で採用しているIPM（書庫の日常環境管理）等に触れつつ、古文書の収集・整理・保存の考え方について学んでいただきました。



講義「古文書の収集・整理・保存」

古文書の整理については当館ホームページ

「保存管理講座◆古文書の整理について」をチェック！！

「出所の原則」についての説明文もあります。



講義「古文書の現状と問題点」

3 古文書の補修・修復と館内見学

- (1) 古文書保存の現状と問題点（40分）
- (2) 館内見学（30分）

実際に資料原本を見ながら、資料の破損や補修の現状について学び、書庫を見学していただきました。

【補修材料豆知識：和紙】

長期保存に適している等の理由から保存に使用している和紙の原料について「楮（こうぞ）」「雁皮（がんび）」「三椏（みつまた）」を紹介しました。



配布資料「和紙見本」

三椏を原料とする丈夫な和紙は、紙幣にも使用されています。身近な例に興味津々！！

(3) 古文書の補修と保存 (70分)

実技演習では和紙について学び、典具帖紙(てんぐじょうし)と呼ばれる極薄の楮(こうぞ)紙を使用して地図の破れを補修したり、剥がれた題箋(だいせん)を正麩糊(せいふく)で貼り合わせたりしていただきました。また、古文書のドライクリーニング(埃等の汚れを刷毛で掃い除くこと)や、和書の代表的な装丁方法である四つ目綴じ本を、実際に針と糸を使って作製する体験をしていただきました。

実技演習の締め括りには、講師(当館職員)から「皆さんに補修していただいたものは、これからも文書館で保存していきます。」と伝えられました。複製品ではなく資料原本を使用することで、単に技術を学ぶのではなく資料を大切に思う心を育てて欲しいという話は、学生の皆さんの心に届いたのではないのでしょうか。



「剥がれた題箋の補修」



「文書のドライクリーニング」

【補修材料豆知識: 正麩糊(しょうふのり) (※)】

添加物等を含まずでんぷんでできているため、長期的に安定しており、再修復の必要が生じた際に、剥がして元の状態に戻すことができる糊です。

補修や保存について興味のある方は当館ホームページ「[保存管理講座](#)」をチェック!!
リーフレット「[文書の保存について](#)」をご覧ください。

全講義終了後には質問が活発にあり、
資料を守ることへの関心の高さや熱意に心打たれました。

◆書架に限りがあるとのことですが、デジタル媒体での保存は難しいのでしょうか。

デジタル媒体による保存は紙に比べて保存実績が少なく、今後いつまで残せるかの見通しを立てにくいのが現状です。

◆保存に使用している「和紙」は、これから100年後も作られているのでしょうか。

国内の和紙の生産状況や、近年、西洋においても補修材として「和紙」が注目を浴びていることなどから、これからも作られ続ける見通しです。

◆洋書も受け入れるのでしょうか。

資料によって区別をせず、文書群として所蔵者にあったものをそのまま受け入れるため、洋書も受け入れます。ここでは、全国で最も多く移住者を送り出した広島県ならではの事例として、移民関係資料の受け入れについて紹介しました。また、移住者が海外から帰国し、家を作る際に、洋館を立てた事例の紹介もありました。そこから、私たちが普段の暮らしの中で目にする景観は、歴史的経緯の中で形成されてきたことについて感じていただけたのではないかと思います。資料と実生活を、地域に結びつけた形で学習をしていただけるのは当館の魅力のひとつです。



最後に、安田女子大学鈴木幸夫教授から「学芸員という仕事をするに限らず、このような学びから先人の知恵を普通の生活に活かしてほしい」と激励がありました。

私にとって、学外実習は現在のような仕事をする事への大きな動機となりました。それは大分市内で「[ホノルル美術館所蔵 浮世絵風景画名品展](#)」開催中に受けた実習です。日本の大衆文化のひとつであった浮世絵を海外から借用し、それを銘打って展示するという事実について、自国の財産を自分たちで守って来られなかったことに悲しみを覚えました。それをきっかけに、普段の暮らしの中にあるものにも目を向け、その土地の風土・気候・人だからこそ創り出された財産を大切にしたいという思いが高まりました。「歴史的に価値ある資料を後世に伝える」などと聞くと、なんだか堅苦しく感じるがありますが、その土地のアイデンティティを守ることは、歴史等の学術的な研究に止まらず、地域での生涯学習の材料として、また、外部へ向けての観光資源としても有用です。さらに、これから私たちが暮らしていく上でのまちづくりにも活かされることでしょう。この「古文書学実習」を通して、学生それぞれの感性から多様に心に刻まれたことと思います。

仕事に直結させるか否かに関わらず、これからの歩みをより豊かなものにしていただければ幸いです。爽やかなパワー溢れる彼女らの今後の活躍に期待を込めて。